

音楽 アラカルト(二)

編 集 部

去年に引き続き、私(萩原)が面白いと思った新聞等から拾い集めた、音楽関係の記事を編集しました。きつと「あ！読んだ 読んだ」と思われるものもあろうかと思えます。悪しからず。

一. オーケストラの最中に居眠り

断っておくが、これはオーケストラを聴いている人の話ではない。演奏している人の話である。

「演奏中に睡魔が襲った。目が覚めて譜面を見ると、わがティンパニの次のひと打ちまでにあと1小節しかない。パチを持つ暇もない。いちかばちかだ。とっさに手でボンと」

ティンパニに打ち込み50年、の野口力さんご自身が新聞に書かれていた文章である。

「エ！そんなことってあるの？」と思った私は、妻

の知り合いで、71歳になる今も、フルートを教え、音楽活動を続けるFさんから

「岩城宏之なんて、チャイコフスキーの交響曲6番『悲愴』を演奏中に寝ちゃって、最終楽章のドラをヴァーンと叩かずに帰ったことがあるって有名な話よ」と聞かされた。

岩城といえども一人、有名な指揮者、小澤征爾には演奏会で指揮を執るのにネクタイを忘れ、仕方なくワイシャツを逆に着て、タートルネック風にして誤魔化した。なんて話も。

また東京都交響楽団の某指揮者は走り回って指揮を執ることで有名。ある日、いつものように演奏中に走り回っているとステージから落っこちてしまい、指揮者不在に。

その他、指揮者によってそれぞれ癖があり、それを覚えこまないと演奏できない。結構、大変な世界ですね。Fさんにいろいろ教えて頂きました。

先の野口力さんは、シューベルトの未完成交響曲を聴いて音楽を志し、国立音楽大学でホルンを吹いたが、鉛中毒で歯を痛めて辞めたと書く。現在84歳だから

かなり昔の話とは言え、楽器器で鉛中毒とは穏やかではない。ホルンがそうなら、フルート、ピッコロ、オーボエは大丈夫？ トランペットは？

ティンパニとは、マレットというバチで羊皮を張った表面を打ち鳴らす太鼓で、オーケストラの最後列で太鼓を2台、4台と並べて演奏する。音程は太鼓ごとに1つしかないから、リズムのほかは音色にこだわることになる。ティンパニ協奏曲などというものもあるが、主役を務める曲は滅多にない。

そういえば、先の岩城宏之も職業欄には、指揮者の他にパーカッションリストとある。更に、ある本の中で「当時の東京芸大音楽部には専攻によって根強い差別が存在し、その中で最下位に属するのが管打楽器部で、特に

『タイコ屋は下層中の下層、少数中の少数で年中差別を感じているような状態だった』

『ピアノ科の女の子と付き合おうとして、『お父様にタイコの人なんかと友達になっちゃいけない』っていわれたのヨ』

なんて追っ払われたことが何度もある」と語っている

ーベンの5番」を」と。

「花より団子 団子よりお酒」の私だって、ベートーベンの5番とくれば、あの「ジャジャジャジャーン ジャジャジャジャーン」と解る。

その他、私の疑問…作曲家は一体どこまでを楽譜に書きこむのかということ。

メロディーのみを作曲。後で、あるいは別の人がそれに基づいて、ピアノ、バイオリン（それも第一、第二バイオリンと分けて）、ピアノ、チェロ、管楽器、打楽器等の楽譜を作るとばかり思っていた。

先のFさん曰く、
「作曲家が一気に全ての楽器の楽譜を一緒に書き込んでいくのよ」と言われた。

妻に同行願って銀座の山野楽器店に行つて見たが、なるほど、全ての楽器の楽譜が並行して書かれている。だから、それなりの厚みがあり、とても演奏会でステージの下から覗き見るものとは違う。よく解らない。それでいて数千円もするので、眺めるだけで帰った。

後日、その報告を先のFさんに話すと、ご自身が持つスコアを貸して下さった。この「音楽 アラカルト」の最後の頁にコピーを載せるので参照。演奏時は

た。

二. オーケストラの楽譜（スコア）って？

音楽に暗い私が、以前より知りたかったのは、オーケストラの楽譜って一体どのように表現されているのだろうか ということである。

指揮者の楽譜にはピアノ、バイオリン、ピアノ、チェロ、フルート・・・ティンパニまで全ての楽器の楽譜が載っているのだろうか？

もしそうだとすれば、しょっちゅう頁を繰っているければならない。

ピアノの場合、時に横に楽譜の頁を繰る人が座っているが、指揮者及び他の楽器の演奏者は、自分で演奏しながら繰っている。それほど頻繁とも思えない。

また、先のティンパニの場合の楽譜は、曲によって最後の最後、1〜2度叩くだけ 何て場合もあるだろうが、その楽譜は？

そこで先のFさんに尋ねると、

「銀座辺りにある大きな音楽関係のお店に行き、『オーケストラ・スコア』を買って御覧。それも『ベートー

各人異なったものを使うようだ。面白いのは、年配の指揮者の場合、指に脂がなくなってきた、思うように頁が繰れず、仕方なく指サックを使っている人もいるとのことであつた。こんなところにも高齢化の波？

三. 永遠の名器 ストラディヴァリウス

今日、どれほど科学が発達しても、人類はいまだに300年前に製作されたストラディヴァリウスを超えるバイオリンを作れていない。

ストラディヴァリウスを作ったアントニオ・ストラディヴァリの生涯は詳しく分かっていない。一説に1644年に生まれ、イタリア・クレモナに工房を構え、当時として非常に長命で94歳で亡くなった。生涯に作ったバイオリンは1千挑以上とされ、約600挑が残されていると言う。

ストラディヴァリと同時代に活躍したゲアルネリ・デル・ジェスも評価は高く、数億円で購入されることも珍しくない。

バイオリン製作者はこれら名器を超える楽器を目指して、300年間奮闘してきた。制作方法、楽器に塗

るニスの作り方などのノウハウ、資料などは全く残されていらない。なぜ、聴衆を魅了する音が出せるのか、科学的に分析しても、謎は解明されていない。

バイオリンは工房の徒弟制度の中で作られてきた。伝統技法は工房で修業した人間にしか伝わらない。だから、残された楽器を見て、挑戦していくしかないという。

では、そのバイオリンの評価は誰がするのか？ もちろん、バイオリニストたちである。試し弾きができるのだから。自己の判断、決断を経て自己責任の上買う。名器には由緒ある老舗の鑑定書があり大丈夫と言われるが、それだって偽造可能である。弾ける人なら鑑定書に頼らず、自分の耳で確かめればよい。買うだけのお金がない人は、パトロンを見付けるしかない。中には、おおよそ音楽と縁のない人でも、値上がりを見込んで買う人、絶品との評判だけで10億円もの大金を払い購入し、屋根裏部屋に保管されていた等の話も残る。

千住真理子さんは、ストラディヴァリウスとの出会いを次のように表現している。

四、名器が嫌う高温多湿も美女を育む

涼しくカラツとしたヨーロッパで生まれた西洋楽器は高温多湿を嫌う。

日本で弾いている楽器をヨーロッパにもって行くと大抵鳴りがよくなるし、逆にヨーロッパから来日する演奏家は少なからず苦勞するようだ。

千住真理子さんのバイオリン・デュランティの場合、湿度50%を超えると機嫌が悪く、60%を超えるとガラガラ声、70%を超えると剝がれて修理が必要になると言う。

彼女の場合、自宅では専用の部屋に除湿をガンガンかけて40%台を保ち、持ち歩く時には特別に作った頑丈なケースに入れるという。ケースの中には楽器専用の乾燥剤を幾つか入れてしっかりと閉じるとも書いていた。

高温も良くないので、外を歩かなければならない時には走るか早歩きと言うのだから大変だ。着いた先のコンサートホールは必ずしも温湿管理

「目前に現れこの腕の中で奏でた瞬間、生涯でただ一度の運命的な恋に落ちた。『音』に惚れ『もう何も要らない』と天を仰いだ。この音色と共に一生音楽を奏でる事ができるなら如何なる物も要りません」と誓い、だから神様お願い、と祈り願ひ、相棒となった」

鑑定書から最初の所有者はローマ法王であり、次の所有者フランス貴族デュランティ家に200年隠されていたため『デュランティ』という名称が付き、舞台で一度も弾かれずにいたという。

「スリーピング・ビューティ」の名を持つ1704年製のストラディヴァリウスを持つイザベル・ファウストも次のように述べている。

「私は多くの曲において自分の解釈に合うようなクリアで明るい、芯の強い音を求めています。この楽器はまさにその性格を持っています。初めて弾いたとき、光り輝くような音色に大変驚かされました」

この名前は、名器を所有していた貴族やバイオリニスト、板の模様などに由来するが、矢張り、貴族の屋根裏部屋や銀行に保管されていたゆえ「眠れる美女」なのである。

が完全な場所ばかりではない。自前の湿度計を2種類持込み、ステージや楽屋を測って歩くそうだ。嫌みに感じられるかもしれないが湿度が危険な状態だと楽器をケースから出せないという、スタッフに協力していただきながらなんとか本番までに湿度を下げる努力をするしかないと書く。

湿度が下がっても、本番演奏中に噴き出る汗や熱気でまたもや湿度が上昇し、結局修理に出さなければならぬことも多々と嘆く。

もともと西洋人自体、日本の高温多湿に弱く、それゆえに軽井沢や六甲を見つけ、開発した。

2002年のサッカー・ワールドカップで何故、日韓は揃って決勝リーグに進出できたか、といえばこの高温多湿に負うところが大きい。

6年後の東京オリンピックの前の年に、ラグビー・ワールドカップが日本で開催される。ラグビーの場合、国籍主義ではないのでゆるい条件さえ満たせば、白人が何人でも全日本の選手として出場できる。しかし、最大の助っ人はこの高温多湿の気候だと思ふ。相手の白人は高温多湿に弱いからである。

さらに、スタイルや顔の彫りの深さ、鼻の高さでは白人に叶わない日本人女性も、きめ細かな肌や手にくつついてくるようなもち肌は、白人にはないものであり、高い湿度のお陰である。

日本の中でも美人の産地として有名な、京都、秋田は、湿度の高さでも抜きんでているという。

五・演歌の源流

昭和十八年生まれ私の場合、音楽の授業以外に数人単位で歌をうたうなど滅多にないことであつたが、中学生のころ、巷に歌声喫茶が誕生した。と言つても中学生の我々には喫茶店そのものが縁のないもので、そこで歌われていたロシア民謡を姉から、ラジオから聞いたぐらいである。そして塾帰りの人通りの絶えた夜道を一人で「ともし火」などを唄つたものだ。

高校になると、歌集が出回り、「波浮の港」や「宵待ち草」等、国民唱歌やフランク永井、裕次郎の歌なども流行つた。

民謡や盆踊りの歌、その内にフォークソング等も流行つたが、私はそのようなグループに属していなかつ

た。だから大学に入ると、体育会系クラブ活動仲間では、軍歌、デカンショ節、旧制高校寮歌と猥雑な数え歌ばかりであつた。

このように考えると『演歌』が歌われ出したのはいつのころからだったろう？

最近、『演歌』の元気がなく、新しいヒット局はほとんど聞かない。カラオケ店では、今もずっとトップを走っているだろうが。

「演歌の源流をたどっていくと、舌鋒鋭く体制批判を繰り広げた明治の自由民権運動に行き着く」と聞くと、「ワッソー」と言いたくなる。でも、

「運動は高級官僚による専制政治を批判、国会開設を求めた。だが、政府は運動を抑えようと弾圧、官権は演説会場を蹴散らした。抵抗をやめない民権運動家は圧政をくぐり抜けて大衆に訴えかけようと、街頭で歌をがなりたてた。それが演歌の始まり」という。

それは、明治20年(1887年)のころである。

壮士演歌とも言われ、弾圧する側に雇われた浪人の白刃が光り、運動の壮士は懐にドスを忍ばせるなどすさまじかつた」と書かれている。

人から人へ直接、こころのありようを伝えたのが演歌で、現代には、底辺で生きる人たちの声を代弁する歌がほとんどない。日本は自分が育ててきた音楽を捨てて西洋音楽を取り入れた。

固有の文化、差異のないところに創造は生まれないとされている。

六・雅楽

今年の四月、新聞のエッセイ欄に雅楽についての話が載つた。面白そうなので切り抜いておいたら、数日後の同月二十七日、妻は友人に誘われて『雅楽』を皇居に聞きに行った。宮内庁式部職業楽部演奏、円舞による。そして、私の地元仲間との集いで、雅楽が話題になった。なぜ今、雅楽？ 私と雅楽(豚に真珠)？

エッセイからの抜粋

「雅楽」とは、元来は「俗楽」に対する言葉で、正統の音楽を意味する。この意味で雅楽と呼ばれる音楽は中国や朝鮮にもあつたが、その音楽そのものは日本の雅楽とは全く別のものである。

日本の雅楽は、日本古来の歌舞に大陸伝来の器楽と舞が融合してできた千数百年の歴史を有する古典音楽である。

主として宮廷、貴族社会、有力社寺などで行われてきたが、現在では宮内庁の楽部が伝承する雅楽がその基準となっている。

樂生として七年間修業を積み試験に合格して一人前の樂師となる。管・弦・鼓と種々の樂器を演奏し、舞を舞い、歌を歌うのだから大変だ。加えて、樂師は西洋音楽も担当する。天皇陛下ご主催の宮中午餐や晩餐の際には、樂師らを構成員とする樂団がクラシックの曲などを演奏する。

日頃何気なく使っている言葉の中で、雅楽由来と言われるものが少なくない。

「二の句」「二の舞」「打ち合わせ」「音頭」「ろれつ」「やたら」などがある。

「八多良拍子」という拍子は難しくて初めはなかなかうまく演奏できないところから、めちやくちやになることを「やたら」というようになった由。

SYMPHONIE PATHÉTIQUE

1

(Symphony No.6, in b-minor)

交響曲第六番「悲愴」

第1楽章

口短調

P. Tchaikovsky, Op.74

Adagio (♩ = 54)

(1840-1893)

OGT. 14

チャイコフスキー 交響曲 第六番 口短調 作品74

『悲愴』 ベートーヴェンの『英雄』、『運命』に遅れること

90年以上 こちらは200頁も続く。

Symphonie 5

I

Allegro con brio ♩ = 108

L. van Beethoven op. 67
(1770-1827)

ベートーヴェン 交響曲第五番 ハ短調 作品67

『運命』 全体 4楽章

こんな楽譜が延々136頁も続く。意外とティンパニーの出番があり、これでは眠っている暇はない と思った。